



南葵音楽文庫ミニレクチャー

若返る巨匠 ヴァンサン・ダンディ

～頼貞が会った音楽家たち (2)

近藤秀樹

2019年1月6日(日) 11:00

南葵音楽文庫
和歌山県立図書館内
和歌山市西高松 1-7-38
tel. 073-436-9500



▲ ダンディ

ヴァンサン・ダンディ (Vincent d'Indy 1851-1931)

フランスの作曲家、理論家、教育者。

ベルギー出身の大作曲家セザール・フランクに学び、デュパルク、ショーソンらとともに「フランキスト」と呼ばれる。ヴァーグナーの影響を受ける一方、「アルス・ガリカ」(フランスの芸術)をモットーに掲げた国民音楽協会に参画、のちに同会会長となる。また、古楽の復興にも熱心で、1894年にはパレストリーナをはじめとする古い時代の宗教音楽の教育・演奏を目的とした「スコラ・カントルム」を設立。「スコラ」はダンディの指導下に発展を遂げ、パリ音楽院と並ぶ高等音楽教育機関となった。

作曲家としては、歌劇、交響曲(4曲)、多数の管弦楽曲(交響詩)、室内楽曲(弦楽四重奏、ピアノ五重奏、ピアノ三重奏、ヴァイオリン・ソナタ、チェロ・ソナタ etc.)、ピアノ・ソナタなど100曲あまりの作品を残した。また、『ベートーヴェン』『セザール・フランク』『作曲法講義』(全3巻)などの著作は邦訳もされて広く読まれた。

理想主義者で妥協を知らない性格のため、しばしば他者と衝突したが、教育者としては弟子の個性を尊重することもできたようで、多くの有能な音楽家を育てた。

I. 徳川頼貞、ダンディに会う: (1) 第二次外遊とパリ滞在

1921年1月25日、神戸出版の郵船加賀丸で、第二次外遊に出発。

→マルセイユに上陸→ニース→モナコ(車で移動)、モンテカルロ歌劇場で『魔笛』を観る。

→ローマでプッチーニ、ニキシュ(指揮者)、ブゾーニ(ピアニスト、作曲家)に会う。

→フィレンツェ→ヴェネツィア

→5月1日にパリに到着。シャンゼリゼ大通りの「ホテル・クラリッチ」に逗留。

パリ滞在中に、ホルマンとともにサン=サーンスに会い、プロコフィエフとも再会する。

巴里の春も盛を過ぎ、次のロンシャンの競馬でこの春のシーズンも終らうといふ頃、一夕私はシャンゼリゼーのホテル・クラリッジにダンディー翁夫妻とホルマン翁を晚餐に招待した。尤もこれは甚だ奇妙な取り合わせと云へば云へるので、ダンディー翁とホルマン翁とは全く正反対な肌合の樂人である。けれども私達にとって、この時を失つては再びダンディー翁に會ふ機會もないのではないかと思はれたので、ホルマン翁の仲立ちでこの會食をすることにしたのであつた。

ホルマン翁は定刻より少し早めに私達のホテルに見えた。ホルマン翁の家はこのホテルから遠くないので、少し早かったがと断つて、私達に面白く話を聴かせ乍らダンディー翁を待たせた。

ヴァンサン・ダンディーは云ふ迄もなく、十九世紀末葉の偉大なフランスの作曲家として、また音樂教育家として世界に名高い。ダンディーはセザール・フランクの偉業を繼承して、然もフランクの到つたやうな、寧ろ単純で感傷的な信仰に陥ることのない作品を作つた人である。それだけにダンディーはゴシック精神の塊りのやうな藝術家である。

約束の時刻が來ると、ダンディー翁夫妻は私達のホテルに現はれた。初對面の挨拶を済ませて食堂に入ると、ダンディー翁とホルマン翁とは、だいぶ周圍の人目についたやうであつた。といふのは、その時まで、元氣よく樂を奏してみた食堂のオーケストラはこの二人の老樂人を見ると急に奏樂をびたりと止めた。そして一齊に立つてダンディーとホルマン兩翁に敬意を表する挨拶をした。二人は軽く會釋した。我々が食卓に着くと、樂師はまた輕快な音樂を奏し出した。この二翁のやうな大藝術家は、あまりこのホテルには見えないのかもしれないと私はその時思つた。

それから數日経つて、ダンディー翁は私達夫妻を翁の經營する有名なスコラ・カントルーム [ママ] に招待して呉れた。學校は静かな落ち着いた處であつた。ダンディー翁は私達を案内して校内を一巡して呉れた。翁の受け持つ作曲の教室も見せてくれた。翁は其處で學生に話をされた。學生は皆ダンディー翁を心から尊敬してゐるやうに見えた。次に翁は私達を導いて講堂に行き、備付けのパイプ・オルガンで翁が敬愛するセザール・フランクの曲を奏してくれた。別れる時、翁は自著「セザール・フランク傳」と、翁自身の寫眞に署名して私達に呉れた。私達は良い記念品として今もそれを座右に持つてゐる。

『蒼庭樂話』(普及版) pp.199-200.

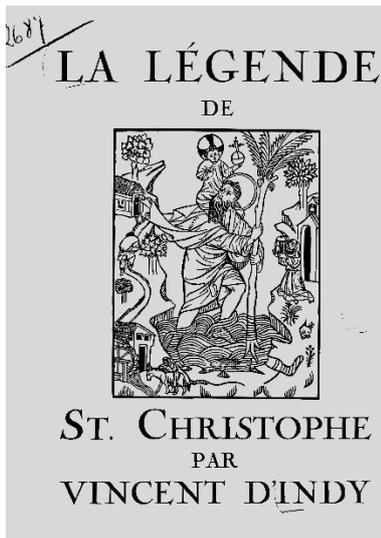
II. ダンディの記念品 (1) 献辞の書かれた楽譜

夫人宛ての献辞が書かれた自筆の楽譜(1921年5月15日の日付あり)は、ダンディの歌劇《聖クリストフォルスの伝説》(*La légende de Saint Christophe*)の一部。

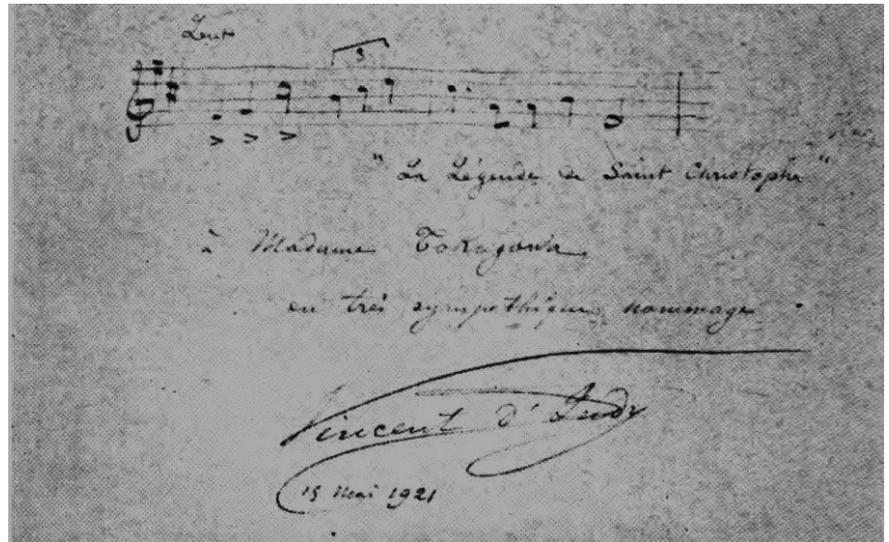
- ・ 幼児イエスを担いで川を渡った聖者クリストフォルスの物語が題材。台本は作曲者自身による。
- ・ 1908-15年作曲、1920年6月初演。
- ・ 夫人に贈った楽譜は、この歌劇の主要主題(曲全体の核となるテーマ)。

この歌劇は、当時のダンディにとっては、① 最新作のひとつであり、② 全力を傾けた大作。しかし、後世の評価は必ずしも高くない。

- ① 音樂の様式が折衷的(中世の神秘劇+ヴァーグナーの影響)。
- ② 台本に難あり。



▲ 《聖クリストフの伝説》楽譜表紙



▲ ダンディ自筆の献辞が記された楽譜



▲ 《聖クリストフの伝説》序幕 冒頭部分

……第一次世界大戦直前にはダンディの政治、宗教、芸術における保守的な信念はかたくなまでに強固となり、彼の誇り高い愛国心は攻撃的狂信性を帯びるようになった。《聖クリストフの伝説》で第三共和政の政治を攻撃したほか、ラヴェルの音楽を含めた当時のいわゆる現代音楽に対して独自の宣戦布告をしている。

(ロバート・オーリッジ、『ニューグローヴ世界音楽大事典』より)

Ⅲ 頼貞、ダンディに会う: (2) スコラ・カントルムのオルガン

スコラ・カントルムの講堂で、ダンディが演奏するフランクのオルガン曲を聴く。

フランクは、パリの聖クロチルド教会のオルガニストで、パリ音楽院のオルガン科教授。オルガン曲も多数作曲(《3つの小品》《3つのコラール》etc.)

スコラ・カントルム講堂のオルガン……シャルル・ミュタン製(1902年)。

ミュタン(Charles Mutin 1861-1931)は高名なオルガン製作者カヴァイエ=コル(Aristide Cavallé-Coll 1811-99)の後継者。



スコラ・カントルムの講堂。奥にオルガンが見える。頼貞がダンディの演奏を聴いたのはここであろうと思われる。

<https://picclick.fr/CPA-Paris-5e-Schola-Cantorum-269-221851055689.html>

IV. ダンディの記念品 (2) セザール・フランク伝

頼貞宛ての献辞が書かれた『セザール・フランク伝』(1921年5月16日の日付あり)は、1914年、第7版(初版は1906年)。1953年には、佐藤浩訳が「音楽文庫」の一環として刊行されている(音楽之友社)。

この本は、ダンディにとっては、

① 敬愛する師フランクについて書いたもので、② 自分自身の音楽の理想を語った重要な本。しかし、批判的な意見もある。

① 師をあまりにも偶像化しており、② ダンディ自身の活動の「後ろ盾」にしている。

⇒ ダンディの理想主義的だが頑固な面？

V. 頼貞が語らなかったこと: 若返る巨匠

1921年当時、ダンディは70歳。現役の音楽家として、作曲、演奏、教育に大活躍。ダンディの妻カロリーヌは、当時34歳。

ダンディは1905年に前妻イザベルに先立たれる。

1916年頃からカロリーヌ・ジャンソン (Caroline Janson) との交際が始まり、のちに再婚。これがきっかけで生活が変化。夏の別荘(作曲をする場所)を、山から海に移す。

ダンディの別荘。アゲは海水浴場で有名。
<http://www.ilrouge.fr/agay/agay-antheor.htm>



……1918年以降、彼の音楽と生き方に重要な変化が生じた。音楽的、経済的状況が変化したこと、また、彼が後に再婚することになるカロリーヌ・ジャンソンとの交友が深まったことから、彼は夏の別荘をアルデーシュからコート・ダジュールのアゲに移した。これに呼応して、より軽妙で、より明るい《海辺の詩》(Poème des rivages) や《地中海二部作》(Diptique méditerranéen) に見られるように、彼の音楽様式も変化を遂げる。これらの作品の高い集中度は、26～30年のより簡潔な室内楽へ直接につながり、そこでは大戦後のオーケストラ作品の外向的で描写的な様式は純化されて、まだ若々しいといってもよい「新古典主義」に変貌し、フランクの影響も目立たなくなっている。

(ロバート・オーリッジ、『ニューグローヴ世界音楽大事典』より)

ダンディがアルデーシュで作曲した作品のなかで、「山」と関わるもの

- 《山の詩》(1881年) ※最初の妻イザベルとの出会いから結婚までを描く。
- 《フランスの山人の歌による交響曲》(1886年) ※ダンディの代表作のひとつ。
- 《山の夏の日》(1905年) ※この曲を書いた年に妻イザベルが亡くなる。

ダンディが頼貞に会った頃に作曲中だった作品: 管弦楽曲《海辺の詩》作品 77

1919-1921年に作曲。妻のカロリーヌ(愛称リーヌ)に献呈。

- 1920年の夏: アルデーシュの別荘で作曲。
- 1921年の夏: アゲの別荘で作曲、完成。
- 1921年12月1日、ニューヨークでダンディ自身の指揮により初演。

《海辺の詩》作品 77

- 第1曲 静けさと光、アゲ (地中海)
- 第2曲 藍色の喜び、マジョルカ島のミラマール (地中海)
- 第3曲 緑の水平線、ファルコナーラ (アドリア海)
- 第4曲 大洋の神秘、ラ・グラント・コート (ビスケー湾)

おわりに ダンディと弟子たち/ダンディと南葵音楽文庫

○ 主要参考文献

ノルベール・デュフルク『フランス音楽史』遠山一行, 平島正郎, 戸口幸策訳, 白水社, 1972年。
ロベール・ピトルー『フランス音楽の11人 グノーからドビュッシーへ』藤原裕訳, 音楽之友社, 1973年。
アンリ・ラヴォア『フランス音楽史』小松耕輔, 小松清訳, 音楽之友社, 1958年。

椎名亮輔『デオダ・ド・セヴラック 南仏の風、郷愁の音画』アルテスパブリッシング, 2011年。

Paul Landormy: *La musique française de Franck à Debussy*, Gallimard, 1943.